

イヴァン・ジャブロンカ著／村上良太訳（明石書店、2024年）

マチズモの人類史 家父長制から「新しい男性性」へ

前川 直哉*

フランスの歴史学者である筆者が2019年に著した*Des hommes justes: Du patriarcat aux nouvelles masculinités*の翻訳である。

本書は4部（全15章）構成となっている。第Ⅰ部「男性による支配」で、世界中にあまねく見られる男性支配の起源を歴史に求めた上で、第Ⅱ部「権利の革命」ではフェミニズムの歴史を概観し、第Ⅲ部「男性の挫折」では産業構造の変化に伴い男性支配が揺らいでいると示される。そして第Ⅳ部「ジェンダーの正義」では家父長制を変調させ、男性性を転換し、男性支配を終焉させるべきとの結論に導かれる。紙幅の都合上全ては紹介できないため、ここでは第Ⅰ部と第Ⅳ部に絞ろう。

第Ⅰ部で筆者は「地上で最も普遍的に見られる特色の一つ」である「男性による支配」について、「家父長制はどこから来たのだろうか。また、家父長制が時代を超えて、あらゆる宗教、あらゆる政治権力において、信じられないほどの安定を得ている理由はいったい何なのだろうか」と壮大な問いに挑む（18-19頁）。同様の問いはゲルダ・ラーナー『男性支配の起源と歴史』（1996）や、最近翻訳されたアンジェラ・サイニー『家父長制の起源——男たちはいかにして支配者になったのか』（2024）など広く議論されてきた。ジャブロンカは旧石器時代に起源を求め、男女の役割分担は新石器時代への移行に伴いさらに進められたと説く。妊娠・出産・授乳といった生物学的な現象に対し「たった一つの普遍的解釈しかなされなかったこと」すなわち「女性を一つの機能に固定し、その生物学的な条件を運命と定め」る解釈により、家父長制が誕生したとの見立てである（46-47頁）。

あらゆる地域や時代の例証を縦横無尽に繰り出す議論は説得力に富み（翻訳は相当に骨が折れたと推察する）、また作家でもあるジャブロンカの文章の切れ味は鋭い。「家父長制は出産能力を女

性の本質であると定めることで成り立っている。女性には腹があると言う代わりに、女性は腹であると言うに等しい」（47頁）、「実際、男性の頭を悩ませているのは、「権威の失墜」や「世界の女性化」よりも、むしろ平等な社会の到来なのである」（290頁、傍点原文）といった印象的な文章が次々と登場する。もちろんこの点も、訳者の功績は大きいだろう。

本書の特色は、家父長制、男性支配について歴史をひもとくのみでなく、「男性性」の観点からこれを検証していることである。レイウイン・コンネル『マスキュリニティーズ』（2022）を援用し、男性性の複数性と階層性を前提としながら、「支配する男性性」が様々な形態をとってきたこと——これ見よがしな男性性、自己抑制的な男性性、自己犠牲的な男性性、曖昧な男性性——を解き明かす（第3章）。

第Ⅳ部では、家父長制が限界にきている現在、どのような男性性が必要かが問われる。

ジャブロンカが提示する新たな男性性の中心は、「支配しない男性性」である（第12章）。評者はこのアイデアを意外に感じつつも、なるほどその手があったかと納得した。この本で説かれている通り、そしてこれまでの男性性研究が明らかにしてきた通り、男性性はその内実を巧妙に変化させながら、男性支配への合意を取り付け続けてきた。近年使われることの増えた「ケアリング・マスキュリニティ（ケアする男性性）」を、評者が手放して歓迎できない理由もここにある。確かにケアはきわめて重要だし、ケアの価値を低く見積もることで男性支配が維持されてきた部分は大いにある。だが「トキシック・マスキュリニティ（有害な男性性）」を批判し、「ケアリング・マスキュリニティ」など新たな男性性を用意することで、結局は何らかの形で男性支配の延命が図られるのでは

* 福島大学教育推進機構准教授

ないか……という疑念を拭えなかったのである。

そこにきて「支配しない男性性」である。確かにこれならば、男性支配の延命を疑う必要はなさそうだ。そしてこのアイデアは、これまでの男性性が男性支配への合意の調達に利用されてきたことを明確に意識させる。

もちろん、全く新奇な表現というわけではない。例えば日本でも沼崎一郎が『「支配しない男」になる——別姓結婚・育児・DV被害者支援を通して』(2019)を著している。ジャブロンカの新鮮さは、男性支配の歴史とその限界を複数の男性性という観点から検証した上で、次のように説いていることだろう。「二〇世紀に女性たちは支配されていた社会で権利を獲得した。家父長制をさらに揺さぶるには、男性の参加が必要となる。男性を危機から救い出すのは、男性の権威を強化することによってではなく、逆に男性の定義を豊かにすることによってである。マッチョな姿勢や特権的な男性性、有毒な男性性などを周縁化するに至るまで、男性性を多様なものにしていくのだ」(382頁)。すなわち、「支配しない男性性」を中心とする新たな男性性の創出と多様化によってのみ、ジェンダーの正義の達成と、男性危機からの脱出が実現しようという主張である。

ジャブロンカは「支配しない男性性」をこう説明する。「女性の意志に対して恣意的な介入を控えることであり、同時に、女性が自由を実際に享受できる社会的および政治的条件を確保することでもある。一人の男性が自分や他人のために、女性がその性あるいはジェンダーゆえに制約を受けることがないような仕組みを実現したとすれば、この男性は支配しない男性性に従っていることになる」(294頁)。カナダのトルドー首相を高く評価し、クォータ制や紛争処理に女性が参加することの重要性、女性の貧困の解決、宗教における平等などに言及しながら、「支配しない男性性」のあり方を説く。「支配しない男性性は言論や権威、知識、武器、富、精神性を共有したいという欲求に基づいている。支配しない男性性は男女の平等を認めるだけでなく、家父長制、ミソジニー、差別、

暴力と闘い、男性性が権力の表現であることを拒否する」(317頁)。

「支配しない男性性」の他にも、エロティックな駆け引きの魅力を保持しつつ完全な性的同意を追求する「敬意を払う男性性」や、あらゆる場における「平等を重んじる男性性」も提案される。ケアの重要性にも当然目配りされ、ナンシー・フレイザーを引きケアの普遍化の必要性を説く。

ベル・フックスは『フェミニズムはみんなのもの』で「思い描くのは、支配というものが世界に生きること」(hooks 2000=2020: 11)と書き起こし、「男性がフェミニズムの旗をかかげて家父長制に異議を申し立てること」が決定的に重要であると訴えた(同前: 178)。ジャブロンカは一冊を使って、こうしたフェミニズムからの呼びかけに正面から応えたと言えるだろう。本書のエピローグで彼は言う。「私は男性の権力に対して反対する男である。私はフェミニストなのだ」(417頁)。

このことを宣言し、男性にフェミニズムへの参加を促すために日本語版で400ページ以上の本が必要だったと考えると、何と男は手がかかる生き物か、との思いも去来する。だがシスジェンダー男性である評者が自身を顧みた時、確かにこうした徹底した考察が必要なのもかもしれないと感じる。男性をフェミニズムに動員するのは、それだけ骨の折れる作業なのだ。本書の冒頭にある通り、「男はあらゆる闘争に挑んできたが、男女の平等のためには闘わなかった。男はあらゆる解放を夢見はしたが、女の解放は夢見なかった」のだから(7頁)。

厚みはあるが文章は読みやすく、論旨は明快であり、随所に多くのヒントが散りばめられたたいへん魅力的な一冊だ。紹介できなかった章にも興味深い分析が満載である。多くの読者、特にたくさん男性に読まれてほしいと願う。

参考文献

hooks, bell, 2000, *Feminism is for Everybody: Passionate Politics*. Routledge. (堀田碧訳, 2020, 『フェミニズムはみんなのもの——情熱の政治学』エトセトラブックス.)